



藤井厚二

Koji Fujii

藤井厚二は49歳の若さで逝った。

もう少し長生きしたら、日本の建築界は変わっていたと、惜しむ言葉を耳にする。

RC造の様式建築になびいた大正末期以後、いち早く環境工学に着目した。

当時「建築は住宅に尽きる」と断言し、住宅の設計のみに専念した建築家はいただろうか。

“実験住宅”と称し、自邸を何棟も建てて住み心地を検証し、それを活かした。

その5回目の作品が、かの有名な「聴竹居」である。

代々続く酒造家の次男として、財力に恵まれた豪放磊落な生活ぶりはつとに有名だが、

その一方には本物を見据える慧眼と細やかな建築家の眼があった。

環境工学の視点から日本の気候風土、和洋を融合させた空間構成を編み出し、

住宅の生活スタイルを見つめ直す礎を築いた。

奇しくも今年、2008年は、藤井にとって大きな区切りの年にあたる。

生誕120年、没後70年、「聴竹居」竣工80年。

メモリアルな年に、藤井の足跡を辿りながら、生き続ける建築を改めて見直してみたい。

時代の先を駆け抜けた住宅作家 藤井厚二

松隈 章

AKIRA MATSUKUMA

まつくま・あきら——竹中工務店 大阪本店設計部／1957年生まれ。1980年、北海道工学部建築工学科卒業。同年、竹中工務店入社。大阪本店設計部、本社・企画室（大阪）、本社（東京）・地球環境室を経て、現在に至る。

主な作品：安川ビル（1997）、瀧定株式会社高槻寮（1999）など。

主な著書：『環境と共生する住宅「聴竹居」実測図集』竹中工務店設計部編（彰国社 2001）、『文化遺産としてのモダニズム建築DOCOCOMO100選展』（共著、新建築社 2005）、『サステナブル・アーキテクチャー 持続可能性の建築（新建築臨時増刊）』（共著、新建築社 2005）など。



怪獣「聴竹居」の玄関前と「聴竹居内閣室」へ至る石段の脇に置かれた石像。「第三回住宅」の庭にも置かれていた。置かれた経緯は明らかになってはいないが、伊東への思想的な同調を象徴している

■ ■ ■

審美眼と思想を育んだ教育環境—第一級的美術品と伊東忠太

藤井厚二は、明治21年（1888）12月8日、現在の広島県福山市宝町に素封家の次男として生まれる。父・与一右衛門は、十数代続く造り酒屋、製塩業、金融業「くろがねや」を営んでいた、かつての御用商人。藤井家は堅実に家業を営むかたわら、円山応挙「瀑布亀」、竹内栖鳳「薰風行吟」、「御所丸茶碗」など第一級の絵画、書、茶道具を数多く所蔵。藤井は幼少の頃から日常的にそれらを目にしている。建築家・藤井厚二の鋭い審美眼は、海と山に囲まれた福山の豊かな自然環境と、この恵まれた家庭環境によって育まれていった。福山中学（現・福山誠之館高等学校）を経て、明治43年（1910）、岡山の第六高等学校を卒業。大正2年（1913）、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業する【*1】。

卒業設計は、中央にドーム状の口トングを持った「A Memorial Public Library」（1913）を残している。様式建築的でありながらも新古典主義を志向したデザインである。一方、大学では「法隆寺建築論」を発表した日本初の建築史家であり、「平安神宮」や「築地本願寺」を設計した建築家・伊東忠太【*2】に教わっている。西洋化一辺倒から脱し、日本独自の様式建築を生涯追い求めた伊東の思想に、大きく影響を受けている。その証しとして、「第五回住宅（聴竹居）」（1928）の入り口に、ちょうど藤井が大学に在籍していた明治45年（1912）、西本願寺の別院「真宗信徒生命保険会社」のために伊東がデザインした“怪獣”の彫刻が置かれている。

■ ■ ■

将来を決定づけた2つのプロジェクト—竹中工務店時代

当時、設計技術の近代化を急いでいた竹中藤右衛門が三顧の礼で迎え、大正2年、合名会社竹中工務店最初の帝大卒設計課員として入社する。

入社間もない時期に取り組んだ2つのプロジェクトが、藤井の将来を決定づけることになる。「大阪朝日新聞社」（1916）と「村山龍平邸（和館）」（1917）である。前者は東京帝国大学で学んだ欧米の建築技術を、遺憾なく発揮して出来上がった先進的な“オフィスビル”。一方、後者は約1万坪にも及び起伏ある広大な敷地を存分に活かしたランドスケ

ープと、石田潤一郎氏のいう「和風のゼツェッション化」【*3】が特徴的な“住宅（邸宅）”。若き藤井には、いずれも魅力的なジャンルであり、実践の中でさまざまな建築設計の知識を吸収する場であったであろう。

時代的にゼツェッション的な傾向があったとはいえ、まだまだ様式建築のスタイルに縛られ、国家の西洋化の意思を表出する必要があった“オフィスビル”よりも、欧米では既にモダニズムの萌芽が始まり、デザインの自由度を増しつつあった“住宅”に、より魅力を感じたということだろう。後に竹中工務店を辞めた藤井は、“住宅”（と環境工学）に没頭することになる。

神戸・御影に現在も残る、京都・西本願寺の「飛雲閣」を思わせる外観を持つ「村山龍平邸（和館）」の壮大なランドスケープと、書院や数寄屋を近代化した細部意匠へのこだわりを見ると、その設計にかかわったことが、天王山につながる大山崎に約1万2千坪の土地を買い求め、次々と“実験住宅・自邸”を建てることを藤井に決意させたのではないかと思えてくる。

藤井の意思を記したものは見つからないので、いずれも想像の域を出ないが、“神戸・御影”と“京都・大山崎”には幾つかの共通点がある。①1万坪を超える起伏ある自然のままの土地、②御影では大阪湾が、大山崎では三川合流（宇治川・木津川・桂川）が望まれる雄大な眺望が得られる土地、③六甲と大山崎の自然の水が豊かな土地などである。

村山龍平邸の敷地内には、起伏に富んだ敷地を活かして建てられた河合幾次設計の「洋館」【*4】と、数寄屋建築・藪内家の茶室「燕庵」の写し「玄庵」といった第一級の建物がおり、それらと対峙するかたちで「和館」の設計が進められたことも大きく藤井に影響しているだろう。

更に決定的なのはプロジェクトを通じて関西の雄、建築家・武田五一【*5】に出会っていることだ。

武田は、藤井とは16歳違いで、同じ福山出身である。また、「大阪朝日新聞社」プロジェクトの新聞社側の顧問を務めていた。当時、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）の図案科教教授であった武田は、ヨーロッパで生まれたアール・ヌーヴォーやゼツェッションなど、近代主義の建築に向けた新しいデザインの潮流を積極的に吸収し、「福島行信邸」や「京都府記念図書館」、「芝川又右衛門邸」といった作品を次々に発表していた。入社したての若き藤井には、脂ののりきっていた40代半ばの武田の強烈な個性は大きく影響しただろう。そして大正9年（1920）、藤井は武田が創設した京都帝国大学工学部建築学科に講師として招かれ、「意匠製図」（後に「建築設備」、「住宅論」、「建築計画論」）を担当、翌年、助教授となる。

わずか6年足らずの竹中工務店在籍ではあったが、将来を決定づけた「大阪朝日新聞社」の他に「橋本ビルディング」（1916）、「明海ビルディング」（1921）、「十合呉服店」（1918）などの設計を担当、黎明期の設計部の基礎を築いた。緻密で繊細なデザイン感覚は、同期入社した早良俊夫【*6】や藤井に勧められて入社した鷲尾九郎【*7】をはじめ、設計部に脈々と受け継がれている。

■ ■ ■

5つの“実験住宅”—自ら興し理論化した環境工学

藤井は恵まれた財力を活かして、自邸を5つの“実験住宅”として建てている。竹中工務店に在籍していた大正6年（1917）、神戸市葺合区熊内に「第一回住宅」を建て、母・元と住む。翌年、出雲大社大宮司の娘・千家壽子と結婚。

大正8年（1919）、竹中工務店を退社し、翌年にかけて、“建築に関する諸設備および住宅研究”のため欧米を視察する。この視察には当時「住宅改良会」【*8】の顧問を務めていた武田の助言があったとされ、藤井は欧米のモダニズムデザインの萌芽と最先端の建築設備に触れ影響を受けた。帰国後、京都帝国大学通勤途中に見つけた京都府乙訓郡大山崎町に約1万2千坪もの土地（山林）を購入し、大正9年、「第二回住宅」を建て移り住む。

大正末頃、医学の世界では建築学よりもいち早く、住居衛生や建築環境研究の論文が発表されていた。京都帝国大学医学部には雑誌『国民衛生』を主宰する戸田正三がいた【*9】。健康重視の世論の表れとして「ラジオ体操」が始まるのも昭和3年（1928）11月のことである。



大阪朝日新聞社（1916）ゼツェッション風の外観に大時計の付いた塔が特徴的な、大阪・中之島の景観を代表する建物であったが、「朝日新聞ビル」建設のため昭和40年代に解体された。地下1階、地上3階、SRC造、延床面積12,020㎡（写真提供：竹中工務店）

【*1】 同級生には堀越三郎、佐藤四郎などがいた。堀越は後に東京大学教授となり、著書には『明治初期の洋風建築』（小滝文吉 1929）がある。佐藤は横浜市の技師として「横浜市開港記念会館」（1917）の実施設計などを手掛けた

【*2】 伊東忠太（1867～1954）
〔INAX REPORT〕No.168、2006.10、p4～参照

【*3】 石田潤一郎「『科学』と『趣味』のはざままで」
『聴竹居』実測図集』竹中工務店設計部編（彰国社 2001）

【*4】 村山龍平邸（洋館）（1909）河合幾次 1879年に創刊した大阪朝日新聞の社主・村山龍平の邸宅。当地で採れる御影石積みの長大な石壇に囲まれた約1万坪の広大で起伏ある緑豊かな敷地に、この洋館、和館、新館、香雲美術館ほかが建っている。竹中工務店の施工。地形を活かして地下1階と1階をレンガ造、2階を木造としている。延床面積757㎡。外観はハーフティンバー風の装飾、屋根は天然スレート葺き寄棟造り。国指定の登録文化財

【*4の補注】 河合幾次（1864年生、没年不明）1892年、東京帝国大学工科大学建築学科卒業。伊東忠太と高校・大学で同期。通信省技師・台湾電信建設部技師を歴任し、大阪に移り河合工作所を開く

【*5】 武田五一（1872～1938）
〔INAX REPORT〕No.169、2007.1、p4～参照

【*6】 早良俊夫（生年不明、1982年没）1913年、兵庫県立工業学校（現・兵庫県立兵庫工業高等学校）卒業。竹中工務店に藤井と同じ年に入社、黎明期の設計部に在籍した。現存する作品としては、神戸市にあるスパンニッシュスタイルの大邸宅「ジェームズ邸」（1934）、長崎県にある竹中工務店初の設計・施工のホテルとなった「雲仙観光ホテル」（1935）が有名

【*7】 鷲尾九郎（1893～1985）新潟県生まれ。1917年、東京帝国大学を卒業後、藤井の勧めにより竹中工務店に入社。「宝塚大劇場」（1924）などを手掛けた。1926年の設計部職制制定後の本店初代設計部長。1937年に取締役、1942年に常務に就任。1943年まで18年間にわたり設計部長を務め、非常にバランスのとれた良きリーダーとして数々の作品を世に送り出した。特にビッグプロジェクトや難工事、短期工事での調整力、推進力には定評があり、その真摯で篤実な人柄と芯の強さで、竹中藤右衛門からも片腕として強い信頼を得ていた

【*8】 住宅改良会 輸入住宅を扱っていた「あめりか屋」の創業者・橋口信助が1916年8月に設立。洋風生活の合理性に着目し、在来住宅を洋風に改良する必要性から住宅改良の啓蒙・実践を目的にした機関だった。月刊の機関誌「住宅」は、わが国最初の住宅専門雑誌

【*9】 戸田正三は、予防医学に属する衛生学が専門。京都帝国大学は、住宅や都市にかかわる衛生学の土壌があった。教授である戸田の主宰する「国民衛生」には、衛生学者による研究論文が大半を占めるものの、建築衛生・計画原論関係の論文も多く発表されていた。藤井も1925～26年にかけて、後に博士論文となる「我国住宅建築ノ改善ニ関スル研究」を発表している。なお、京都・北白川の「戸田邸」（1924）は戸田正三の自邸で、藤井の設計



第三回住宅（1922） 藤井は自らが確立した環境工学と、プランや椅子座・床座などの住み心地を自邸で実験・検証していく。「第一回住宅」は神戸・熊内に建てられたが、2回目以降、最後の「第五回住宅（聴竹居）」までは、すべて京都・大山崎に建てられている。第一回、第三回は2階建て、他は平屋建て。一番小さい「第四回住宅」には、家族は移り住んでいないという。現在、「聴竹居」のみ現存（第四回の解体部材は保管されている）。「実験住宅」という名称は、恐らく後に付けられたもので、藤井自身の記述にはない



上—扇葉荘（1937） 京都市上京区、烏丸通を挟んで京都御所の向かいに建てられた京都の織機問屋・中田商店の中田余瓶の大邸宅。木造2階建て、藤井の死の前年に竣工した遺作。藤井の一周忌の法要もここで営まれた。1940年、生前から親交のあった新建築社社主・吉岡保五郎が自ら編集に参加した作品集『扇葉荘』（村田治郎・伊東恒治編）が新建築社から発行されている。藤井建築の集大成であり代表作であったが、残念ながら近年解体された
下—大覚寺心経殿（1926） 大覚寺は藤井の郷里・福山の名刹・明王院の本山。法隆寺の夢殿を連想させる八角堂。縦長のプロポーション、伸びやかな屋根がいかにも藤井らしい。RC造、構造は森田慶一

【*10】『日本の住宅』藤井厚二著（岩波書店 1928）
 【*11】『聴竹居図案集』藤井厚二著（岩波書店 1929）
 【*12】『続聴竹居図案集』藤井厚二著（田中平安堂 1932）
 【*13】ブルーノ・タウト（1880～1938）
 近代ドイツを代表する建築家。ベルリンを中心に、新しい素材を駆使した前衛的な作品を数多く発表。ナチス政権から亡命し、「日本インターナショナル建築会」の招待により1933年来日。タウトが桂離宮を訪れた時の言葉、「それは実に涙ぐましいまでに美しい」は有名。約3年半、高崎市を中心として日本に滞在、賓客として桂離宮をはじめ、伊勢神宮、飛騨白川など日本建築の美に触れた。また、建築だけでなく、広く日本の伝統芸術や一流の文化人たちを歴訪し、独自の著述、講演などを通してその評価、紹介に努めた。静岡県熱海市の「日向別邸」（1936）が日本に唯一現存する作品、国の重要文化財
 【*14】『日本 タウトの日記 1933年』B.タウト著、篠田英雄訳（岩波書店 1975）
 【*15】アントニン・レーモンド（1888～1976）
 チェコ出身の建築家。F.L.ライトの下で学び、「帝国ホテル」建設の際に来日。その後日本にとどまり、1923年、事務所を開設。「レーモンド軽井沢別邸（夏の家）」（1933）、「聖ガール教会」（1935）、「東京女子大学講堂・礼拝堂」（1937）、「群馬音楽センター」（1961）など、日本建築の伝統的な良さを取り入れたモダニズム建築の作品を多く残す。所員として在籍した前川國男や吉村順三、ジョージ・ナカシマ、増沢海をはじめ、日本人建築家に大きな影響を与えた

日本の伝統的な住まいで、経験的に行われてきた日本の気候風土に合わせる建築方法を、科学的な目で捉え直すことが、藤井の大きなテーマとなった。自ら着目し、理論化した環境工学の知見を設計に盛り込み、居住・実証し、改善を加えながら次々と実験住宅を建てていったのである。

木舞壁・2階建ての「第三回住宅」（1922）、土蔵壁・平屋建ての「第四回住宅」（1924）、そして最後に木舞壁の上に土を塗り、クリーム色の漆喰で仕上げた平屋建ての「第五回住宅（聴竹居）」。

実験住宅で実践の中から、真に日本の気候風土に適した住宅の在り方を、科学的に環境工学の点から考察し、昭和3年、自著『日本の住宅』【*10】にまとめている。



終生追い求めた“日本の住宅”の近代化—洋風ではなく、和風でもなく

今からちょうど80年前に建てられた「聴竹居」は、時代を超え、いつの時代にも評価され得る“日本の住宅”としての普遍性を備えている。それはなぜだろうか。

藤井は中工務店時代を含め、25年間に50を超える建物を設計している。その大部分が住宅だ。住宅以外で現存するものは、京都・嵯峨野の「大覚寺心経殿」（1926）のみである。

環境工学の理論書『日本の住宅』、更に住宅設計の集大成、完成形として写真と図面で構成された『聴竹居図案集』【*11】、『続聴竹居図案集』【*12】を著し、理論と実践の成果を世に発表している。更に昭和5年（1930）には明治書房から、この3つの書物を統合し英訳した『The Japanese Dwelling House』を発行し、世界へ発信している。藤井が世界の潮流に沿っていたことを示すエピソードの一つとして、昭和8年（1933）には、B.タウト【*13】もかの有名な「桂離宮」訪問から1週間もたない5月9日に「聴竹居」を訪れている。その日記に「極めて優雅な日本建築」、「氣持のよい階段」、「この茶室は茶室建築の革新である」【*14】と記している。翌、昭和9年（1934）にタウトも同じ明治書房から『ニッポン—ヨーロッパ人の眼で見た』を出版している。

藤井は環境工学による住宅研究と実践をこうして確信し、世界へ向けて公表。その後も実作を次々と設計していった。そして昭和12年（1937）に完成した京都の「中田邸（扇葉荘）」が遺作となる。昭和13年（1938）7月17日没、京都・嵯峨野の二尊院にある、自ら病床でデザインした墓所に眠っている。完成形とした「聴竹居」に住んでわずか10年の短い生涯であった。

同じ年に生まれ、日本の伝統的な木造建築から近代建築のエッセンスを発見した建築家・A.レーモンド【*15】は、戦後も目覚ましく活躍し、学生時代に「聴竹居」を訪れた吉村順三はじめ、多くの建築家を育てている。茶道、華道、陶芸を嗜み、家具、照明、書籍の装丁など身の回りのあらゆるものを日本の住宅に合わせるべくデザインし、生涯、住宅設計に専念した藤井がもし長生きしていれば、現代の住宅の様相も大きく変わっていただろう。

今年、没後70年を迎える藤井の残した“生き続ける建築”は、そのほとんどが個人住宅であるために小さく目立たない。しかし、「其の国の建築を代表するものは住宅建築である」【*10】として、生涯、日本の住宅の理想を求めたその意思の持つ現代的な意味は、極めて大きい。環境がますます大きなテーマとなってきた21世紀に生きるわれわれにとって、藤井の住宅と、そこに込めた思想をくみ取ることの重要性は増すばかりである。

イタリアの哲学者であり、歴史学者でもあるB.クローチェは、「すべての歴史は現代史である」と述べている。歴史を描くということは、過去を語ると同時に現代に生きる人々にとってもその意味を問うことであり、でき得れば未来への展望を示すことだ。

藤井の“日本の住宅” = “生き続ける建築”を見つめることは、まさにそこに続いている。*（写真・図版解説ともに筆者）



10畳大の広さを持つ居間。造付けのソファ、地袋を持った床の間、幾何学的なデザインの天井など、極めて密度の高い空間となっている。「聴竹居」では失われている電気スタンド（ピアノを照らすために置かれた）、テーブル、イス、絨毯などが竣工当時のまま残され、藤井が住空間の細部までデザインしたインテリアを、トータルに知ることができる（写真提供：ふくや美術館、©定藤元了）



左—6畳大の広さの独立した食事室。椅子座に合わせた高い天井、洋風の家具、そして障子と造付けの家具、幾何学的な壁面・天井と、和洋が一体化したデザインとなっている

右—玄関から居間に続く廊下状の広間と一体となった、大きな窓のある明るい階段室。斜めと垂直の線を活かしたシンプルなデザインの手摺が特徴的（写真提供：2点とも八木重一）

八木市蔵邸

【建築概要】
 所在地：大阪府寝屋川市
 規模：地上2階
 構造：木造
 竣工年：1930年

実験住宅が「聴竹居」をもって完了した直後の1930年に完成した木造2階建ての個人邸。同じく寝屋川市にあった「喜多恵吉邸」（1930、現存せず）とともに、大工も「聴竹居」と同じ酒徳金之助。敷地の南側にあった離れの茶室（やはり閑室と呼ばれていた）は、建て替えのために解体されているが、家具や照明、電熱器などを含むインテリアが残っており、藤井の住宅思想と実践を知る上で貴重な建物である



藤井の遺作「扇葉荘」に似たデザインの引き違いの扉を持つ玄関。右手に庇を受ける柱とスクリーン、柱のない左手前には末広がりの石段があり、来訪者を優しく迎え入れるようなデザインは「聴竹居」に似ている



縁側 1階の大広間の南側には、自然豊かな庭越しに遠く大阪湾を望む縁側が設けられている。畳に座った位置から風景を十分に堪能できるよう横棧を減らしたサッシに、当時としてはとても大きなガラスがはめ込まれている



藤井らしい幾何学的なデザインの浴室天井。四隅にデザインされた換気のためのグリルがある

1階から3階へとつながる和洋折衷の階段室。セツエーション風の手摺支柱が特徴的。最上部は網代天井になっている



村山龍平邸（和館）

【建築概要】
所在地：兵庫県武庫郡御影町
規模：地下1階、地上3階
構造：木造
竣工年：1917年



和館から伸びる渡り廊下 藤井の設計した和館（書院棟）と、洋館、玄関棟、茶室棟は、空中の渡り廊下で結ばれている。高低差のある自然の地形をそのまま活かす建家の配置を願った施主・村山龍平が、建物間を移動する際の生活利便性に配慮したデザインとなっている



洋館から望む和館全景 六甲山の裾野、御影の起伏ある敷地に馴染むように、セットバックしながら積層した地上3階建ての建物である。最上階には望楼があり、西本願寺の飛雲閣を連想させる外観だが、天井が高く、かつ、柱などすべての部材が細く細く設計されており、後の藤井デザインの萌芽が見られる（写真提供：田畑みなお）

南面外観 起り（むくり）のついた瓦葺き屋根と水平に伸びた軒を持つ和館は、周囲の自然に調和している。縁側を支えている柱も極めて細く軽やかなものになっている。縁の足元には六甲の豊かな湧水を巧みに取り入れた池と小川が設けてある





食事室から居室、縁側方向を望む。細長い居室を中心としたワンルーム構成の空間。縁側、客室、読書室、30cm上がった畳間、そして円弧状の開口を持つスクリーンで緩やかに仕切られた食事室が、居室の周囲に配置されている。家族が適度な距離感をもって集えるさまざまな居場所が用意された“空間=居間”といえる。

「聴竹居内閑室」 “閑室”と名が付けられた藤井の書斎兼接客空間
上—天井部分 竹皮の網代、萩、竹、皮付丸太を巧みに組み合わせた饒舌な天井ディテール。和紙貼りのすっきりとした「聴竹居」の天井とは対照的
中—上段の間 下段の間より30cmほど上がった畳敷き。下段の間の腰掛と緩やかに仕切る円弧状の開口は、椅子座と床座の連続性を生み出している
下—下段の間 コーナーサッシューのところに造付けの革張りの腰掛があり、コーナー部分には違い棚に似た小さな飾り棚が設けられている



■ 聴竹居・聴竹居内閑室

【建築概要】
所在地：京都府大山崎町
規模：平屋
構造：木造
竣工年：1928年



上—玄関のすぐ脇にある接客のための客室（応接室）。わずか10㎡の広さであるが、椅子座に合わせた床の間、造付けの腰掛、床（とこ）照らしを兼ねた照明など、「聴竹居」の中で最も和と洋が混然と一体化したデザイン密度の高い空間である。右手腰掛背後の窓は、視界が開けるように2枚とも右側に寄せることができる。

左—縁側のコーナーサッシュー 夏は熱を遮断、冬は熱を家に取り込むサンルームとなる縁側のサッシューは、風景を取り込むために軒を枯木（はねぎ）で持たせ柱をなくしている。特にコーナーサッシューは、嵌殺しガラスの突き合せ部分の方立ての見付を極限まで小さなもの（斜め方向で20mm）にしている
右—南面全景 デザイン的にも環境工学的にも「聴竹居」の顔となる部分である。日射調整を兼ね、水平に、軽やかに伸びた銅板平葺きの庇と、透明感のある縁側の連窓。裏面には屋根裏の換気口と、縁側の足元には通風用の小窓。更に土台部分には床下換気口とともに部分的に自然石を埋め込み、周辺の自然との一体感を図っている（2005年撮影）



所蔵者の都合により
掲出できません

所蔵者の都合により
掲出できません

【特集1】
生き続ける建築 7

1

2



3



4

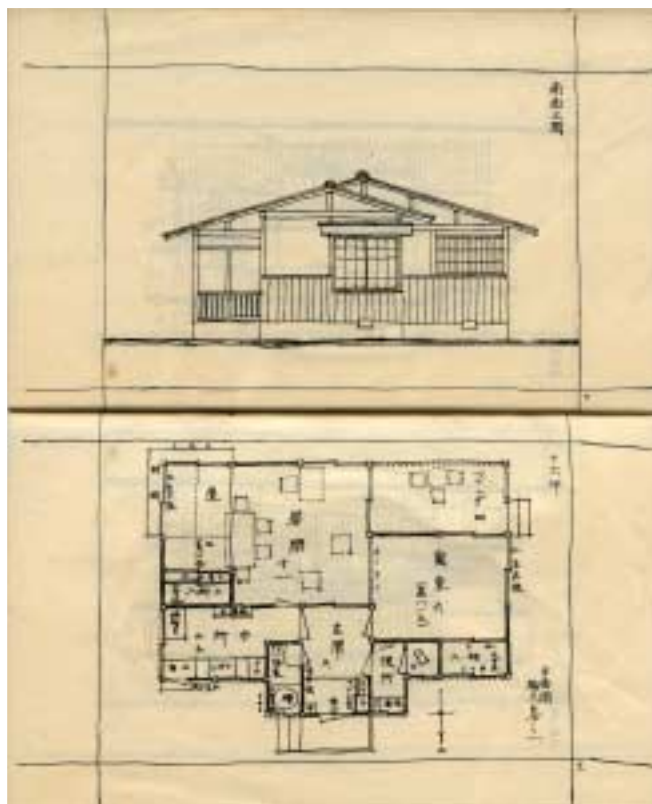


5

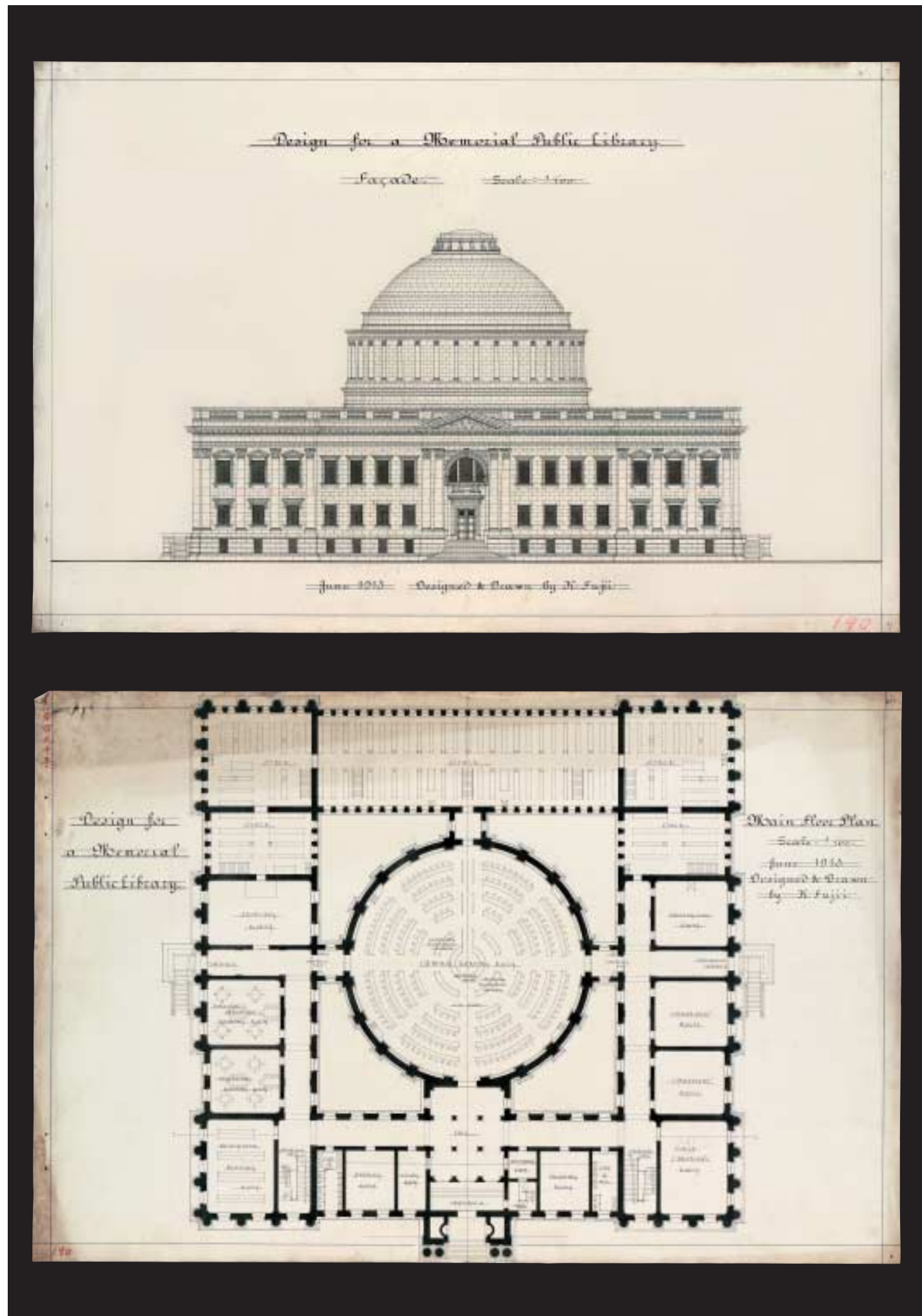


6

- 「聴竹居内下閑室」(茶室)のスケッチ 「聴竹居」の敷地内に建てられた茶室の床の間部分のスケッチである。藤井が細部に至るまでスケッチで検討・確認していたことが分かる
- 「聴竹居」客室展開図および建具平面・断面詳細図 方眼紙に描かれた客室まわりの図面である。これは設計図面ではなく、恐らく1929年に出版された「聴竹居図案集」におさめるために書かれたものである。隙間風を防ぐことを考慮した障子の召し合わせとしている
- 電熱器 藤井がデザインした電気ストーブ。同様のものを「聴竹居」の各室にも備えていたという。カバーは藤焼と鉄製のもの(写真)がある
- 藤焼 藤井は大山崎に窯をつくり、陶工・川島松次郎などの協力の下、「藤焼」と称して作陶を重ねた。1932年に作品集「聴竹居作品集 二」(田中平安堂)を発行している。藤井が設計した住宅の竣工の際に、施主に贈られたとのことだが、普段使いの器も多く、長女・福子、次女・草子のお



- 宅で今も日々大切に使われている。4の鶴の形をしたものは釣香炉で、「聴竹居」客室の床の間に現存し、遺作「扇葉荘」の客間にも飾られていた
- 「住宅に就いて 三」 1931年春に石版刷りで印刷・発行された小冊子。総数35ページにわたる住宅プラン集。延べ面積15坪から19坪まで7種類の平屋建て小住宅の平面・立面図が掲載されている。「聴竹居内下閑室」での接客の際に配られたとのこと。大邸宅ではなく標準的な小住宅プランを示すことによって「藤井の考えた日本の住宅の普及」を意図したもののか
- 京都大学大学院工学研究科建築学専攻所蔵
- 八木家所蔵、写真提供:ふくやま美術館、©定藤元了
- 馬場福子所蔵



卒業設計「A Memorial Public Library」(1913) 東京帝国大学工科大学建築学科の卒業設計。細部に新古典主義の影響が見られるものの全体的には様式建築である(東京大学工学部建築学科所蔵)

藤井厚二 人と作品

1888-1938

略歴

- 1888年(明21) 広島県福山市に生まれる。生家は十数代続く造り酒屋
- 1910年(明43) 東京帝国大学工科大学建築学科入学。学習院に通う妹、母とともに東京小石川に住む。日本画家・結城素明に絵を習う
- 1913年(大2) 東京帝国大学工科大学建築学科卒業。合名会社竹中工務店に入社、神戸勤務。同社で最初の帝大卒の設計課員となる
- 1917年(大6) 第一回住宅に母親と住む
- 1918年(大7) 千家壽子(第80代出雲大社大宮司、東京府知事・千家尊福の子。兄は詩人の千家元麿)と結婚
- 1919年(大8) 竹中工務店退社。建築に関する諸設備、および住宅研究のため欧米諸国に旅行
- 1920年(大9) 帰国。京都帝国大学工学部講師を嘱託され、意匠製図を担当。同大学中央大講堂設計事務を嘱託される。第二回住宅に移り住む
- 1921年(大10) 京都帝国大学助教授に任ぜられる
- 1923年(大12) 夏、実験住宅で気温などのデータを収集する(翌年の夏にかけて)
- 1926年(大15) 「我国住宅建築ノ改善ニ関スル研究」で工学博士の学位を受ける。京都帝国大学教授に任ぜられ、建築学第四講座(建築設備)を担当
- 1927年(昭2) 去風流八世・西川一草亭に入門し花を習う
- 1928年(昭3) 衛生工業協会大会で「日本趣味」と題して講演。新建築主催「住宅展覧会」に出品。岩波書店から『日本の住宅』出版
- 1929年(昭4) 岩波書店から「聴竹居図案集」出版
- 1933年(昭6) B.タウトが「聴竹居」を訪ねる
- 1934年(昭9) 満州に旅行
- 1937年(昭12) 直腸ガンを告げられる。堀越三郎、佐藤四郎とともに東海道五十三次を自家用車で旅行。兄と有馬温泉に旅行。入院し、手術を受ける。一時回復し、教壇に立つ
- 1938年(昭13) 逝去(49歳)。正四位勲三等。戒名・淳風厚道居士。京都・嵯峨野の二尊院で自らデザインした墓標に眠る

主な作品

- 1916年(大5) 大阪朝日新聞社(大阪)、橋本ビルヂング(兵庫)
- 1917年(大6) 村山龍平邸(和館)(兵庫)、大阪朝日新聞社(大阪)、第一回藤井自邸(兵庫)
- 1918年(大7) 村山邸(朝日新聞社長宅)(兵庫)、十合呉服店(大阪)
- 1920年(大9) 第二回藤井自邸(京都)
- 1921年(大10) 明海ビルヂング(兵庫)、斎藤邸(京都)、賀屋邸倉庫(京都)、深瀬邸(京都)、坂本邸(不明)
- 1922年(大11) 第三回藤井自邸(京都)、山中邸(兵庫)、石崎邸(京都) 有馬文化村住宅群(兵庫)、森田邸(京都)
- 1923年(大12) 鈴木邸(不明)、永井邸(不明)、宇治町役場(京都)、浜部邸(京都)
- 1924年(大13) 第四回藤井自邸(京都)、戸田邸(京都)、久保邸(京都)、太田邸(京都)
- 1925年(大14) 三戸邸(京都)
- 1926年(大15) 奥村邸(京都)、喜多源逸邸(京都)、大覚寺心経殿(京都)
- 1927年(昭2) 池田邸(京都)
- 1928年(昭3) 第五回藤井自邸(聴竹居)(京都)、聴竹居内閑室(京都)、杉本邸(京都)
- 1929年(昭4) 大沢邸(京都)、山田邸(京都)
- 1930年(昭5) 八木市蔵邸(大阪)、喜多恵吉邸(大阪)、聴竹居内下閑室(京都)、聴竹居内茶室(京都)
- 1931年(昭6) 濱口邸(京都)、内田邸(京都)、本庄邸(京都)
- 1932年(昭7) 清野邸(京都)、田中邸(京都)、貴志邸(京都)、高木邸(京都)、大阪女高医専病院(大阪)
- 1933年(昭8) 汐見邸(京都)、小松邸(京都)
- 1934年(昭9) 小川邸(京都)、岩本邸(京都)
- 1935年(昭10) 金生堂(京都)、堀野邸(京都)
- 1936年(昭11) 八木芳之助邸(京都)、島津邸(広島)
- 1937年(昭12) 清野邸(京都)、瀬戸邸(京都)、中田邸(扇葉荘)(京都)

取材協力・資料・写真提供

京都 大覚寺 / 京都大学大学院工学研究科建築学専攻(表-4) / 小西章子・小西伸一 / 財団法人香雪美術館 / 坂本勝比古 / 高橋功 / 竹中工務店 / 田畑みなお / 東京大学工学部建築学科 / 馬場福子(p.4上) / ぶくやま美術館 / 元井登古世 / 八木重一 / 『扇葉荘』村田治郎・伊東恒治編(新建築社 1940) / 『武田五一・田辺淳吉・藤井厚二 日本を意匠した近代建築家たち』ぶくやま美術館編(ぶくやま美術館 2004) / 『「聴竹居」実測図集』竹中工務店設計部編(彰国社 2001) / 『日本の住宅』藤井厚二著(岩波書店 1928) (50音順)

*特に明記のない写真は、2007年10~11月に新規撮影したものです。



「聴竹居」の前の藤井厚二一家。妻・壽子(ひさこ)、長女・福子(とみこ)、次女・章子(あやこ)、長男・裕三に囲まれてにこやかに微笑む藤井厚二(1930年代半ば頃)(馬場福子所蔵)

二尊院にある藤井の墓標 死を悟った藤井自らが病床でデザインした。死の数日前に墓地周辺の様子を知らたいとの藤井の願いを受けた長女・福子が写真に撮ったものの、現像を待たずに亡くなったという。適度な反りを持ち、水平に力強く伸びた屋根が特徴的。きりりと引き締まった見事なプロポーション



【次号予告】
次号(4月20日発行)の「生き続ける建築」は山田守です。